

【トークセッション】

ニッセイ基礎研究所 大澤 寅雄氏
ふくおかNPOセンター 古賀 桃子氏
アートボランティア・プランナー 藤原 旅人氏

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました藤原旅人です。

冒頭に田中さんから少しお話がありましたが、今回のフォーラムの趣旨を説明し、どういう流れで大澤さんと古賀さんをお呼びすることになったかをお話したいと思います。

文化ボランティアフォーラム10周年ということですが、インターネットのヤフーで「文化ボランティア」と検索していただくと、「とびうめの会」が一番上に来ますね。これはすごいなと思っています。そして、今年の3月に田中さんからご連絡をいただきまして、「どんなフォーラムにするか少し考えてくれないか」というお話をいただきました。その時に色々議論をしましたが、僕からの提案として「オール福岡」というか、外部から人をお呼びするというよりは福岡で活動・活躍されている方をお呼びして、議論をしたいと提案し、そういう議論の中からお二人をお呼びすることになりました。

まず大澤さんですが、シンクタンクの一員として文化政策に携わっていらっしゃって、文化ボランティアを相対的に語れる人だなと思いました。相対的というのは、少し距離をおいて文化ボランティア活動、あるいは文化芸術活動を社会の中でどういった役割、どういった所にあるのかというお話をしてくださると思い、お呼びしたいと考えました。

古賀さんもそういう文脈で福岡の事情にもお詳しく、文化活動・文化芸術活動・文化ボランティア活動を相対的にお話くださる方じゃないかなと思いました。

先ほどのお二人の講演で、僕の狙いは結構的を得たと思っています。これで半分ぐらい僕の役割は果たしたかなと、少しホッと一息ついているところです。

次に質問ですが、大澤さんにまずお聞きします。大澤さんのプロフィールには、文化生態観察という言葉が書かれています。大澤さんのすごいところは文化芸術活動や文化芸術の営みを生態系として捉えているところだと思います。そこで質問ですが、僕が皆さんと共有したいと思っていた部分が、先ほどの講演の中から省かれてしまったので、もしよろしければ最後の「持続可能な地域の生態系の部分・循環」についてお話いただけないかなと思います。これは今日の議論で結構重要な部分になると思っています。

大澤寅雄氏 「ありがとうございます。お手元の私のプレゼンテーションさせていただいた資料の最後の方に、持続可能な地域文化の生態系という4枚ぐらいの資料を載せていますのでご覧ください。

これは、僕が自治体の職員さんや公立の文化施設の職員さんなどを相手に話すときの内容ですので、直接ボランティア活動をしていらっしゃる方に向けた内容というわけでもないのですが、ただ全体の話としては今日の話に繋がるなあ、と思って付け加えました。

藤原さんに言っていたように、ニッセイ基礎研究所の研究者とあわせて文化生態観察を自分のプロフィールに名乗っているのは、「文化」というものを「生態系のように眺めたい」と思ったからです。生態系とあわせて生物学的な見方もできるわけです。

生態学・生物学には多分見方の違いで、森のなかにカブトムシがいるとしても、カブトムシを研究するのは生物学者かもしれませんが、僕はそのカブトムシが森の中にどのような関わり方をしているか、木とか土とか他の虫とか鳥とか、その他の動物とどういうふうに関わっているかを観てみたいな、と思っています。

文化に置き換えると、音楽をやっている人、演劇をやっている人、美術が好きな人、図書館好きな人などいろいろいらっしゃるでしょうが、私は、それが世の中とどう関わっているのだろうかということ、あたかも「生態系を眺めるように」その森とカブトムシとの関わり方を眺めるようにみてみたいなあ、といつもそう考えています。

このパワーポイントの中で、その生態系の構成要素というふうに書いているのは、これは中学か高校で習うと思いますが、生産者・消費者・分解者という役割が自然の中にあって、生産者というのは多くの植物で、水分とか養分に光が当たることで光合成して有機物を生み出すわけです。それを虫が食べたり、その虫を動物が食べたり、その動物を人間が食べたり、葉っぱ等を人間が食べたりするわけです。そういう有機物を消費するのは消費者。排泄したり死んで土に還るといったときにもう一回有機物を無機物に分解してくれる分解者、バクテリアや菌やキノコなどですが、そういう分解してくれる役割があって分解されることでもう一回有機物が生み出されるという、グルグル、グルグル止まらずに循環している生態系があるから私達は生きていけるわけです。

次の世代にその森なら森を残していけるわけですがけれども、そういう生態系のように文化も考えるとしたら、例えばその文化政策とか文化施設の持つ役割は何かしらと考えると、それは文化的な営みにつづく有機物を生み出すような役割をしていると思います。

そこにアーティストが関わったり、観客や参加者が関わったり、そのことによってまちが活き活きしたり、子どもたちが豊かな情操を育むようになったり、観光資源になったり・・・、最終的にそういったものがまちに文化があることで、このまちに住んで良かったとか、生まれてよかった、子どもたちにも住み続けてほしい、子どもたちが住みたいと思えるまちになっているなというふうに、納得でき、しっかりと消化、分解できるわけです。

だからホールとか図書館とか美術館があって、そこで文化的な取り組みがされているということは、直接そこに自分自身が絵を売りに行ったり音楽を聞きに行くことがなかったとしても、「あってよかったな」、「あるって良いね」といった、皆の財産だと納得ができるという、最後の分解のところまでいって、また次の循環が生まれるだろうと思います。

もし、「これが分解できない、どうも腑に落ちない、なんかお祭り騒ぎ、イベントばかりやっているけど、なんであんな無駄なものに税金使っているの？」というふうになると分解できなくなって、そこで循環が止まってしまう事がありうるのでは、と考えます。

次は、ビオトープの説明をします。

地域における生態系の中で、そこに無い生き物、例えば私の住んでいる糸島には山もあるし海もあるし、田園地帯もあって非常に豊かな生態系がそこにあります。ところが山の中にはその海がなかったり、島には池がなかったりして、生態系としてはどうしても単一化してしまうこともあるわけです。そういう中で、例えば、池がなかった地域に池を作ってみると、池の中の営みが新たに生まれて魚や虫などが住むようになり、水の中でしか生きられない植物が芽生えたりします。するとそこを求めて虫や鳥が寄って来たりします。その虫たちがさらにその地域に今までなかった生物の多様性を生み出すことができます。そういうビオトープみたいな、例えば、池があることでそのエリアの多様性をまた促し、新たな循環を生み出すことができるのではないかと思います。ビオトープのようにその地域エリアの中の循環、いわゆる“いったりきたり”が起きるといいのではないかと考えています。

今日、ボランティアの皆さんに特に言いたいのはこの循環することです。

例えば皆さんがおやりになっている活動そのものも、ある種ビオトープ的な“たまり場”になっていることがあると思います。地域の中で、こういう楽しみ、文化的な取り組みをやっておられますが、そのたまり場と地域との間をいったりきたりする“鳥であったり虫であったり”するような役割を実は、ボランティアの人たちは担っていると思います。

「あそこの池にいったことはないけれども面白そうなことやってるねえ！」というふうに地域の人達に思わせるためには、そこを行ったり来たりする役割の人が必要で、それは単なるお客さんじゃなくて、そこに関わっているボランティアの方々がすごく大事な役割を果たしているのではないかと考えて、それでペーパーの最後に付け足したわけです。

藤原氏 「ありがとうございます。その行ったり来たりという行為が、僕も大切だと思っていますし、最初の分解者というのが極めて重要な存在だと思います。その分解者がいないと循環というところへ届かないと思いますが、分解するというのは、例えば、ボランティアの人たちに例えると、どういった行為になるのでしょうか？」

大澤氏 「僕自身の仕事も、分解者の一人だなと思っています。

ボランティアの人達の営みが、どういう役割を担っているのか、この“分解”ですが、単に生産と消費の間を行ったり来たりするだけだと、やがて循環が止まってしまうだろうと思います。そこで必要なことは分解して評価することで、ボランティアの人達が行っている取り組みを、なぜその取り組みが必要でどういう意味があるのか、どういう成果をもたらしているのか、どんな効果があるのか、ということを説明できるように評価することが分解者の仕事で、その地域の人達が理解し支援が始まることでようやく循環が成り立つと考えています。

だからそのボランティア活動されている方も、自分たちがやっている活動、楽しいことや、

良いことやっていると思っているが、その人達の中だけで完結してしまうと、何のためにやっているのか周りの人がよくわからないまま終わってしまいます。

やがて高齢化していき、ボランティアに参加する人も少なくなってしまうこともあると思います。」

藤原氏 「わかりました、ありがとうございます古賀さんにも少しお話を聞きしたいのです。古賀さんには、いろんな話題・トピックをあげてもらいましたが、シンプルな質問をしたいと思っています。古賀さんが20年間福岡で活動されていて、福岡という場所に焦点をあてると、こういったところが大きく変わったとか、逆に古賀さん自身が求められる役割がこう変わったとか、変わらなかったとか、そういう話をお願いできたらなと思います。」

古賀桃子氏 「福岡は、私の生まれ育った所で、お仕事も、福岡市を始め他にもいろいろ県南とか県北とか、筑豊とかいろいろなところに出向いています。

変わったことは、これは他県もそうかなと思いますが、30代の人たちのまちづくり、地域おこしと言わずとも、実績がそれに直結する取り組みが各所で生まれてきているなあ、ということです。

一つは、地方創生とかいう国の政策の動きももちろんありますが、それより少し先んじた段階で4年ぐらい前から、グルメだったり、農作業だったり、いろんな体験を通じてそれこそSNSもフル活用しながら30代が中心となって、これに上の世代、40代・50代、下の世代、高校生から20代ぐらいが呼応して、そこで新しいエネルギーがうまれて、それを行政が着目をして活用するようになった。そのような動きが出てきたなという印象があって、私はすごく好意的に受け止めています。

中には「そんなに続かんやろうもん？」というふうに見ている年長者の方もいたりしますが、結構、彼らが触媒となって、いろんな活動を複数やっていますので、それを相対的に見渡してみると地域で横のつながりができていて、それに行政職員の方も個人で活動するような、非常に緩やかだけれども確かな動きになっているな、というふうに見ているところです。

私自身ですが、プロフィールにも書いていますように、もともと「ふくおかNPOセンター」という名の通り、NPO、ボランティアの応援を目指し、設立とか、マネジメント、運営に関するノウハウについて個別の相談とか、勉強会をいかに高めていくかというところを足がかりに活動してきました。プロフィールにも公民館、社会福祉協議会、児童館など書いていますが、ここ4～5年位かな、各地域で活動されている、あるいは仕事をされているさまざまな機関に出向いて、地域課題を一緒に捉えて、NPOないし企業も含めたマッチングについて新しい試みを生み出す黒子役に努めています。

社協でいうと、社協は社協で非常に悩まれており、彼らが直接つながっているのは結局、

既存のいろんな活動をされている方々で、民生委員や自治会とかですが、新しい試みにチャレンジすることでこそ次の世代とか新しい担い手を生み出すことができる、というところに非常に苦心をされていて、そこの企画とか、運営のお手伝いをしております。

いろいろな地域の舞台裏をウロウロして外からのマッチングを図るみたいな、そんな役割が増えてきています。

私はこれを非常に嬉しいなと思いながら活動しているところです。」

藤原氏 「ありがとうございます。それでは何かご質問とか、ここのところもう少しお聞きしたいという方はいらっしゃいますか。」

質問 1 「興味深いお話ありがとうございました。大澤先生にお伺いします。

今、先生のお話の中でも若い方たち、特に30代ぐらいの方たちを中心にSNSを駆使しながら情報の伝達がされているというお話をされていまして。私もSNSの活用は大事なことと思いますが、それ以外にボランティア活動に対する情報を提供する方法、何かありましたらご教授いただきたいと思います。」

大澤氏 「ありがとうございます。これは世代の問題もあるのかなと思いますが、僕自身もfacebookとかのSNS（ソーシャルネットワークサービス）を使った情報の発信・受信をやっております。ところが、かえってそれが他の世代にアプローチしにくい、例えばお年寄りの方とかにはアプローチしにくい状況になっているのかなあ、という気もしています。

インターネット、SNSというのはそういう意味では場合によっては非常に世代間の分断を生みやすいというリスクもありながら、僕はすごく使いやすい、使い勝手がいいなと思っています。特にSNSに関しては双方向の情報ができることです。

こちらから発信したことに対して、しっかりと帰ってくる反応があったり、それは“いいね”だけでもいいわけで、投稿して“いいね”が多いことを実感したり、コメントをもらってそれに返事をしたり、そこが一方通行の発信に終わらずにコミュニケーションが生まれ、そこに関わりが生まれる、相手との関係が生まれるというところがすごく使い勝手がよいところだなあと思っています。

他には、今までの例えば紙を使ったチラシを作るにしても、最近はデザインって大事ななあ、と思っています。それはある意味、先ほどの古賀さんのお話の中でも分かり易さが大事だという発言がありましたが、同時に、何かしらデザインから発するものがあり、それは主催者自身のアイデンティティなどから、かけ離れたデザインにしてもしょうがないな、というふうには思いますが、分かり易さと同時にデザインから発せられる何か、デザインの部分で親近感って結構うまれているのではないかな、という気がしております。

古賀さんいかがですか。」

古賀氏 「広報とか情報発信・伝達って、永遠のテーマだなと思っています。

“情報”には、2つの活動・役目があると思っていますが、発信をしっかりやって、あなたに届ける系の広報と、他に日頃からそれこそディスクロージャー、情報開示とか言われますが、日頃から自分たちの活動、ブログなりホームページなりで活動の日記的なものを明らかにしつつ、組織の情報も開示しておくこと、その両方が必要だと思います。

広報の世界では、プッシュ型とかプル型とかいうこともあるようですが、「あなたに届けましょう」ということでは、私はSNSが非常に有用だと思います。これから有用だろうと見ていて、あなたに届けますが“ロコミ”になっていわゆるシェアみたいな、それは伝わりやすいということがあるなあということを感じています。

さらに、やはりロコミってすごく大切だと思います。

広報でいうと、今、宮崎県の都農町という人口一万人のまちで、スポーツコミッションという、「スポーツのまちづくりをいろんな地域資源をつかってやりましょう！」というプロジェクトのお手伝いをしています。この町はこれまで行政で全く住民参加をやったことがなく、いわゆるワークショップとかもやったことがないという中でワークショップをやっていますが、下は小学生、上は70代の方までお互い“始めまして”みたいな状態の方けっこう来られていて、「どうやって人集めてるんですか」と聞いたら、SNSも含めてとにかくロコミの仕掛けをありとあらゆるところに散らばらしている、と言われていました。上の年代だと回覧板だったり、ロコミの広がりやすい老人クラブだったり。それから若い世代だとやっぱりSNSでのロコミ。とにかくロコミをいかにいろいろな媒体、いろんな世代に向けてやってもらっているというお話でした。

その辺りはやはり広報、外向けの発信は相手をみて媒体も変えつつやっていくことです。加えてそのデザインですね。今、大澤さんがおっしゃったデザインも非常に大切だなあと思っているところです。

ちなみに発信でいうと、20代以下は、twitterが中心です。facebookはしていない。

やっても見ているだけで、発信はしないという、そんな傾向があります。」

藤原氏 「いま僕は30代でfacebookまでは分かっています。twitterも少しは分かりますが、最近学部の学生に聞いたら、もう時代はLINEですよ、と言われて「あ〜、LINEかあ！」と思いました。そこは、今回追えなかったところです。やはり情報発信というのはすごく大変で、大切だけれども、どんどん変革しているな、というのは強く感じました。

実は、もう一点だけ大澤さんにお聞きしたい点があり、とても衝撃的だったことがあります。それは、大澤さんの資料の4ページの「ボランティアへの参加理由」のところで、平成28年度の調査で、「社会の役に立ちたいと思ったから」が回答者の半数近く占めていることで、これはかなり僕にとって衝撃的でした。

去年のフォーラムでお話したときに、10年前のボランティア活動に参加されている方

は「公益性、社会の役に立ちたい」という参加動機の方が多かったが、最近の参加者は、「自己実現、自己表現」を考え参加している傾向にあるとお話をした記憶があります。ところが、この資料を見ると、公益性、社会のために役立ちたいと思っている方が多いということです。これについて思い当たるところや、何か考えていることはありますか。」

大澤氏 「そこは僕も全く意外だったですね。こんなに社会に役に立ちたいと思っている人が増えていて、この件については、自分は分かっているつもりになっていましたが、全然分かってなかったな、と思いました。

ただ、実のところ、この調査は文化芸術に特化した調査ではなく、ボランティア活動全体に対しての質問で、災害がこれだけ多発している現状で、28年度だから今年ほどの災害の多発ではなかったにしても、やはり社会的な、古賀さんの話の中でも出てきました「新しく難しい課題」がこれだけ増えてくると、どうしても社会の役に立ちたい、という気持ちが増えるのは理解できます。

社会の役に立ちたいとか、困っている人を支援するという参加動機は、文化芸術分野のボランティアに関して言えば、余りそれを強調することは敬遠されている、と僕は思っていました。むしろ“やりがい”のほうが大事なんじゃないのかな、と思っていたところです。例えば音楽で子どもたちを助けるとか、社会に役立つ文化芸術みたいなことを打ち出すことがいいのかなとも考えます。

これは実は最近、文化政策の論議の中でも文化とか芸術っていうのが社会に活用されるということを、国をはじめ、僕もずっとそうやってきたものの、途端に、こんなに道具になっていいのだろうか、ということに気づき始めています。

例えばボランティアの人にたくさん関わって欲しいからといって「アートで社会の役に立つんですよ、みんなも社会の役に立とうよ」っていうのを言っているのか、少し、モヤモヤしますよね。」

古賀氏 「私に関っている中でも、NPOを応援する人たちのネットワークですが、社会課題解決というのが声高に言われていて、政策的にはNPOはその一つのプレイヤーだ、みたいに言われています。我々は社会課題解決の手段なのか、と。そもそも社会変革とか、仕組みを変える、もつという精神も変えるとかですが、そもそもそっちで活動していた筈の人たちではなかったのか、とその辺の問い直しを盛んにされている、尖った運動家もいたりします。

「社会に役立ちたい」というところですが、若い世代はソーシャルという言葉に非常に敏感に反応するなという印象があって、私まだそこ紐解けてないのですが、ぜひ皆さんにも聞きたいなと思っています。彼らはなんで“ソーシャル”という形容詞で響いて、ソーシャルはおしゃれだとか、ソーシャルは遊びだと思えるのか、その傾向も知りたいなと思っています」

藤原氏 「そうですね、ボランティア活動に参加する若者は結構少なくなっているけど、そのソーシャルに引き付けられてか、まちづくりとか、地域おこしとか、他の地域での活動においては、多様な人を巻き込んだ活動に若い人たちが大学という場所を出て参加をしているという傾向はあると感じています。

神奈川県での調査だと思いますが、大学生を対象として平成23年に出された報告書では、若者がボランティアというキーワード自体を毛嫌いしている、アレルギーをもっている、という話がありました。それは、一緒にいる友達とかに、自分がボランティア活動をやっているというのを声高に言えないという意見でした。ボランティア活動をやっていること自体を友達に知られるのが嫌だ、みたいな話もあったようです。

そういったことを踏まえ、今回のタイトルを「新しいボランティア像を探して！」としました。これは思い切ったタイトルだと自分では思っています。この10年でボランティアに関する考え方が変化していること、そしてそれを踏まえこれからの社会について考えたいと思い、このようなタイトルにしました。

また、古賀さんがおっしゃってくださったソーシャルという社会を意識した言葉に、若い人が興味あるというのがすごいなというのは僕も常々感じています。」

大澤氏 「ソーシャルの意味合いは、それこそインターネットで変わってきたのではないかという気もしますが、SNSのソーシャルもそうなんです。「社会」というのが市民活動・市民運動っていうときの「社会」っていうことと、今ネットワーク上の「ソーシャル」といっている言葉と、例えばソーシャルビジネス、ソーシャルアントレプレナー、社会企業とか、社会的なビジネスっていうことは割と若い人はイケてる感じなんじゃないかなと思います。」

古賀氏 「先程の生態系のお話がすごくビンビン響くものがあっていろいろな階層を想像しながら考えていました。活動の担い手のことだったり、現場での循環だったりとか。

先ほど世代交代の話をしましたが、ある地区の青色パトロール、自主防犯組織で、青パトというとは皆さん非常に地味なイメージをお持ちかもしれませんが、そこは他世代交流というのを主目的に活動されていて、防犯はもちろんされていますが、青パトツールにいかにも地域の住民をくつつけるか、というところを勝負どころにしながら7~8年活動されている団体があります。その団体は、団塊世代が当初の保安メンバーだったのですが、とにかく面白い活動を日々やっていこう、ということで食事のイベント、豚汁会とか、それからデモンストレーションと銘打って地域の行事に必ず青パトを行進させることにしました。あと日替わり弁当形式でのボランティア活動プログラム、この曜日は「パパさんだけが乗れるよ」とか、そういう楽しい演出をとにかく豆にされていたら、結構、下の世代が会員になるようになって、3年前にちょうどPTA活動などもろもろ終えたばかりの40代後半の女性が2代目の会長になったという嬉しいお話です。

それこそ生態系の循環かなと、多分その分解者に若い世代が入ってきて、ここはやはり面

白い、続けていかなければ、と地域の人たちが評価してくれて、それで生産者の側に回って有機的なつながりが出来た、これは非常に人材育成というか、ヒントになるなあと思ったところです。」

藤原氏 「逆に大澤さんは、古賀さんのお話を聞いてどうですか。」

大澤氏 「ボランティアだけでなく、文化とか芸術に携わっている人たちにもっと社会のことに関心を向けなきゃいけないなあ、やはり思います。聞いてよかったなと思うのは、現場の目線、草の根の目線から見た社会の在り様というのは、他人事にできないことってこんなに沢山あるのだなあ、と思いました。

僕は、文化芸術が社会の何かに役に立ちますっていうふうには、積極的には言いたくないけれども、文化芸術がじゃあ社会から孤立していいことやっています、私達はすぐれた芸術をやっていますということで、社会から切り離していいのかっていうと、すごくそれも嫌で、ちゃんと地続きのそれこそビオトープの関係であって、生態系との間に地続きの関係がうまれているんだといったときに、社会に役だっていると思います。ややもすると、社会の側がどんな環境になっているのかということも知らずに何かいいことやっています、といっていることが多いなあと思います。

だから古賀さんの話を聞きながら新しい課題、8050（ハチゼロゴーゼロ）なんて初めて聞いたなあ、と、ちょっと衝撃的な話とか、その古賀さんの目線、その眼差しそのものに感銘を受けました。」

古賀氏 「私は実は、期待していることがあって、先ほどNPOの世界でも、地域課題解決の政策に消費されていいのかっていうのが話題になっています、と話をしましたが、とはいえ公民館とか、児童館とか、社会福祉協議会など、今、地域課題解決に非常に関心が向いてきている傾向があって、彼らいい意味で真面目なので、文章も真面目で、「若い世代に来てほしいと望んでも絶対こないよね」みたいなプログラムばかり打ち出しておられるなかで、アートの手法っていう言葉がふさわしいかどうか分かりませんが、アーティストの方が関わることで、非常にまた違う視点で面白いアプローチで、狙いはそのものですが、魅せられたり、展開できるっていう可能性が非常にあると思っています。そういう点では地域課題解決の中では是非アーティストなりアートにかかわっている団体にどんどん参入してきてほしいという期待はもっているところです。」

質問2 「今アーティストという話がありましたが、実は私、音楽の世界で約40年間活動をしてきました。

音楽をやっている人たちは、いい演奏会を開催すればお客さんが来るんだ、と言う方が多かったですが、最近やっと外に出て行って、小さな編成でやっていこうとか、個人でやっていこうとかいう演奏会が増えて来ています。しかし、いわゆる採算上ペイしなければな

かなかやってくれません。ボランティアというのは、まず無償ということでしょうが、無償というのはまず難しいというのが、私が今まで長いこと携わってきた中で感じることです。ではどのあたりで妥協点を求めるか、ということが一つの課題になってくるのかなと思います。

例えば画家が作品を寄付しますので町のどこかに飾ってください、というような話をしても、いわゆる目につくようなところになかなか飾ってもらえない、何のために寄付したのだろうか、というようなことになります。また無償で演奏してくださいと言われても、自分たちはその演奏をするためにこれだけ練習を重ねて、時間を作って演奏しているのだと。その演奏をすることで、僕はオーケストラの関係だったので、先々、オーケストラを聴きに来てくださるお客さんに繋がればいいなという気持ちは持っていますが、果たして無償で、と言われると私達も生活があるわけです。

いわゆる文化に関わっている人たちにとっては、ボランティアというものにどういうふうに向き合ったらいいのか、すぐに解決策が見当たりません。

そのあたりをどう考えたらいいのか、お伺いします。」

質問3 「私もクラシック音楽に関係している者で、先程の無償、アーティストに対する無償っていうのがすごく引っかかりながら聞いていました。

東北や、熊本の被災地で、一流アーティストの人たちがボランティア活動されました。

震災後、音楽とか芸術でボランティアをしようというのがすごく盛り上がっていますが、その後何が起こったかというと、地域の音楽家が有償のコンサートが出来ないような状況になったそうです。ほんとに良かれと思ってされたことですが、音楽など目に見えないものに関して“タダで聞ける”という雰囲気になってしまって、その当時は特別な場合だったこともあるのですが、東北とか熊本では、困った状況になっているということを耳にしました。

以前からアートに関しての無償の範囲、どこまでが無償でどこからが有償かというのが、アーティストの中でも結構議論になっています。

例え話でいうと、ご飯食べに行ったレストランでお金払いますね、でも演奏は目に見えない、身につけるものではない。目に見えないものだと「ちょっとタダで弾いてよ」とか、簡単なデザインが求められている場合、デザイナーに「ボランティアでデザインしてよ」というふうになりがちで、どこまでお金をもらっているのかっていうのがアーティストの人たちもすごく悩んでいると思います。

私も今日は、ボランティアの件、そのあたりもお話が聞きたいなと思ってきました。」

大澤氏 「この話は、午後も引き続きやるといいなと思いますが、端的に短くいうと、持続可能性の問題です。無償で、それをやることはお互いにとって続くことなのかどうかということになる、持続可能な活動であればそれはそれで成立するかもしれないと思います。

タダだから駄目だとか、有償だからいいとかっていう問題でもないかもしれない。
無償では、多くの場合それは続きませんね。ではどうやって続けていくことが可能なのか
っていうことも考えたときに、演奏してほしい方と演奏する側の“あいだ”の問題である
と思いますね。

演奏してほしい側は、被災して払う余裕がない。演奏する側はそれで生計を立てている身
としては、何度もととは、まず出来ません。続かないということであるならば、その間を誰
か、担い手となる支えが必要になってくると思います。

そこにもしかしたら中間支援ということが必要となります。その中間支援とは、もしかし
たら行政であったり、地元の企業や共感してくれる市民の方などで、どれだけ集めてこら
れるか、だと思います。

これは、やってほしい人、やりたい人の間だけでは有償無償の障壁を超えることは難しい
と思いますので、いかにそこに共感する人たちを集めることができ、支える、続けてい
ける仕組みを整えられるかということが大事じゃないかと思っています。」

藤原氏 「その視点は大事ですね。持続性や循環というポイントも含め、今日の午後も考
えていきたいと思います。午前の会はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。」

司会 「どうもありがとうございました。素晴らしいトークセッション、御3人様にどう
ぞ皆さん拍手で。ありがとうございました。大きな問題を抱えて、これからやっていきま
しょう。」